

# News letter

Number 14

日本獣医解剖学会報

October 1st, 1999

## 熊本で日本獣医学会が初めて開催されます

皆さん、火の国に参集しましょう。解剖関係は懇親会を含めてすべて九州東海大学・農学部・家畜生体機構学研究室の森友靖生先生がお世話いただきました。会として森友先生に感謝の意を表します。

## 第128回日本獣医学会

(1999年10月13日、15日)

大会長：山田進二先生(化学及血清療法研究所)

於：熊本市市民会館、熊本市産業文化会館など

### 解剖学関連の一般口演

会場：熊本市産業文化会館 SII 会場

演題と演者は省略しますが、以下のように配分されております。

10月14日(木)(午前)内分泌、リンパ系、神経系。

10月15日(金)(午前)泌尿生殖器系、血管系、運動器、呼吸器

(午後)消化器。

### 解剖学関連のポスター発表

会場：熊本市産業文化会館 SIII~VII 会場

解剖に関係ありそうな主な分野は以下のように記分されております。

10月14日(木)13:00-16:00:P5 実験動物・動物モデル, P6 受精メカニズム・技術, P7 血液・循環器, P8 内分泌, P9 遺伝・遺伝子解析, P10 発生・分化・アポトーシス。

10月15日(金)13:00-16:00:P16 サイトカイン, P17 生体リズム・感覚器・中枢神経, P20 解剖学的・組織学的構造。

獣医解剖学会関連行事は以下の如くです

### 【日本獣医解剖学会総会】

日時：10月15日(金)講演終了後

会場：熊本市産業文化会館 SII 会場、

議題 1) 学会誌発刊について(アンケートの結果をご報告し、学会誌の発刊の是非についてご討議いただきます。)

報告事項 1) 国際対応を含めた獣医解剖学教育充実に関するアンケートについて(佐々木先生) 2) その他

(総会終了後、懇親会場行きのバスが出ます。)

### 【日本獣医解剖学会理事会】

日時：10月15日(金)12:00-13:00

会場：熊本市産業文化会館 SII 会場

### 【日本獣医解剖学会懇親会】

日時：10月15日(金)夜(総会終了後バスで移動します)

場所：阿蘇の司ピラパークホテル(熊本県阿蘇郡防中1230)

参加費：15,000円(宴会宿泊費と朝食代を含む)

もし、申し込みを忘れた方は、九郎丸先生(東大獣医解剖03-5841-5049)にお問い合わせ下さい。

ワークショップ(WS10)

### 【身につけておきたい特殊染色法】

日時：10月13日(水)15:00-16:30

会場：熊本市産業文化会館 SII 会場

座長：佐々木文彦、岩永敏彦

1) リンパ管と血管の染め分け法。加藤征治(大分医大解剖)

2) 多重免疫染色法。松野健二郎(熊本大医解剖)

3) 末梢神経の染色法。平松浩二(信州大農)

4) *in situ* hybridization 法。本道栄一(帯広大)

### 【第6回獣医解剖サテライトフォーラム】

日時：10月14日(木)16:00-17:00

会場：熊本市産業文化会館 SII 会場

演題：「樹状細胞の分化・動態と生体防御」

演者：松野健二郎先生(熊本大学医学部解剖学第二講座)

(講演要旨) 抗原提示の専門家として知られる樹状細胞(Dendritic cell: 以下 DC) は、マクロファージの仲間、動態と機能が明らかに異なる5つの成熟段階を持ったダイナミックな細胞集団である。

第1段階は樹状祖細胞(DC progenitor)のステージであり、主に骨髄に存在し、自己複製しながら前駆細胞を産生する。肝臓にも祖細胞が存在し、肝移植によりホストのリンパ組織に遊走し、アロ免疫応答を引き起こす。また、ヒト末梢血幹細胞もDCに分化させることができ、immature DCの時期に自己の白血病細胞を加えると白血病抗原をとりこみキラーT細胞を誘導できる。

第2段階は前駆細胞(DC precursor)のステージであり、骨髄から血行性に体中の臓器にコンスタントに供給される。ラテックスをラットに静注すると、ラテックスを貪食したDCが肝リンパに出現する。これは、感染・炎症が起こった時、DC前駆細胞がその現場に早期から動員されるモデルと考えられ、次の見張り番期のDCを援助する形で免疫応答をより早く確実なものにする仕組みになっている事が推定される。

第3段階は、見張り番期(immature DC)で、分布した各臓器内に侵入してくる抗原を摂取する。表皮のランゲルハンス細胞、気道上皮のDCや心・肝などの実質臓器のInterstitial DCなどがこの代表である。DCは可溶性抗原のみならず、微生物、異常細胞などの顆粒状抗原に対してもこのステージで貪食能を持ち、免疫応答を惹起できる事がわかってきた。

第4段階は、遊走期で、DCは抗原情報を取り込むことにより1段階成熟して、リンパ組織への遊走能を獲得する。臓器を離れたDCの多くはリンパ管に入り、所属リンパ節へ遊走しT細胞領域(傍皮質)へ集積する。一部は、血管に入り血行性に脾臓へ遊走し、白脾髄のT細胞領域(PALS)へ集積することもある。また、ヒト扁桃では、DCは陰窩上皮からT細胞領域(濾胞間域)まで扁桃組織内を遊走し、そこで免疫応答を起こすと言われる。さらに、ラットではDCを静脈投与すると、肝臓から肝リンパ節に血液・リンパ転位を起こす。これは、肝臓クッパー細胞が血液中のDCを捕捉し、肝の免疫応答を調節している可能性を示唆する。

第5段階は、抗原提示期(mature DC)である。リンパ臓器に入ったDCは最終段階まで成熟する。そして、T細胞と細胞集塊を形成して抗原提示を行う(4)。DCの抗原提示細胞たる由縁は、他の抗原提示細胞とされるマクロファージやB細胞と比較して、少数で強い免疫応答を惹起出来ること、さらにはDCのみが未感作のナイーブT細胞を活性化しうる事にある。

本講演では、各段階のDCについて主に *in vivo* における我々のデータを示し、さらに、応用として、DCをベクターとした免疫療法のモデルをお話したい。

